

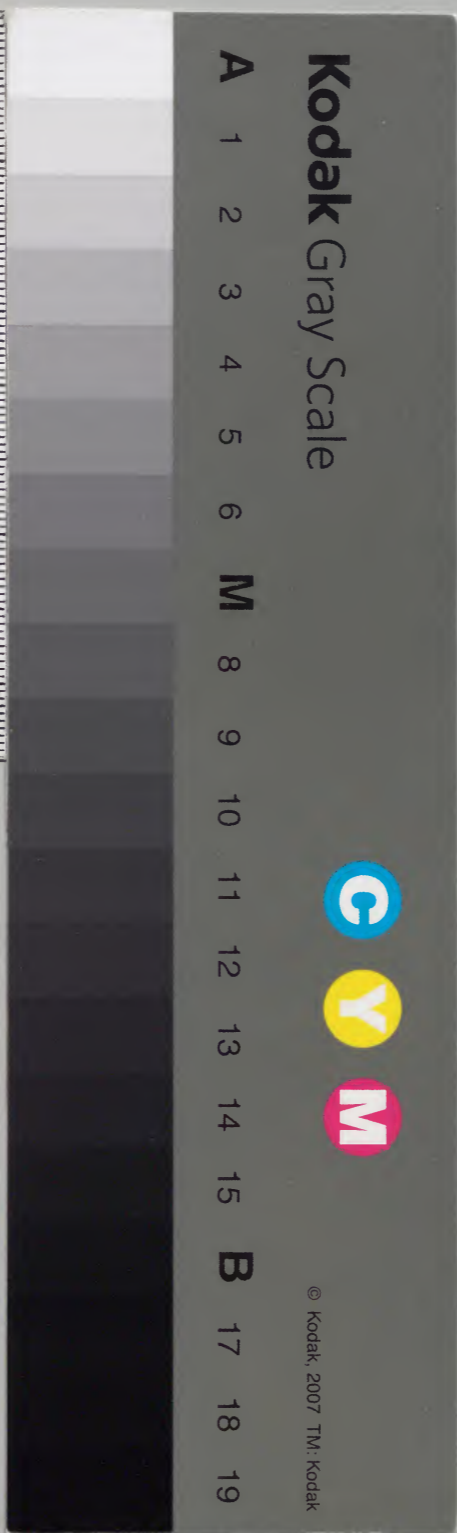
落原拾葉

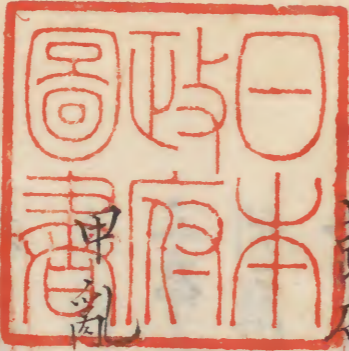
三十三至
三十五

庫	文	閣	内
七四	二九	五	和
函	三	六	書
一	冊	號	類
九			
架			

内閣文庫	
番號	和 29568
冊數	23 (10)
函號	174 228

内一〇七九七紙





落原拾葉卷之三十三



信濃

中村元恒編

男 元記校

内一〇七九七號

本會義昌逆心之事

茲上故常刀先生義賢の嫡孫本有前九多次朝日將軍義仲

より二十二代の末系伊豫入左義昌より名高り、柞武田

徳兼朝信玄智仁男の之孫を以て甲斐信濃を印迫國

と學處せし先らより、ゆゑに義昌も流石源家乃嫡流あり

とくも世に傳ふありきは信玄の幕より、頼朝

嫡嗣の信以親子の盟涉りて、此れより信玄を以て、

家統より、柳造根の事とあり、ゆゑにや、怨念成會に因り

落原拾葉

織田信長の事(密計の子細)なりき事と世の人々の言ふことこれと
 不知なり然れども多し石にる茅野左京進より其を正十年
 正月廿七日の曉忠に甲州新府中へ馳来りて土倉大馬尉に
 討し密に披露せしむるに其曰去年秋の夜より企送を
 とりて信長元来より送りて時宜居居若し先を去り
 信長其事成り信濃堺の書と謝請しよあはれむに有
 自らも謀定しく説教不似しより多し其後執事も不審ゆり
 思ふれりきととも如新大凶成りありしに沖河を以てしり
 武田左京進信豊丹山縣
 三郡之邊今福尾前守横田十郎多末を轉部合之子余孫信
 別府中少佐亦多し向くお働く搦手の大将とく仁科
 五郎信成之并 諏訪敏仲守同伊豆守を亦諏訪高志の流

二の余孫上伊能口よりお働く大に搦手法を小亦多し道に
 お働くことと彼答のりる海江江双の大切ゆり一丈
 二を眼をば前卒跡踏せしむ福のあむるに殊に涉堂
 未消はる跡も又し通ひは各徒し陳示しり亦多し
 茅野三郎左衛門 山村七郎右衛門と以て謀しやきり候急の
 節目りつゝ茅野左京進折檻状加えし如し令公を密に
 其件く系し 拙者隠居の地許りしに密に密に密に密に
 殿不女是元信豊殿と市之陳のり一候誓入言新し
 中しりしに信豊の地代より當代よりわきりし其情更
 て忘るるに殊に文昆才の好代を今より年久しそ上層
 の大御前血判令茂如彼と云是といひ甲陽に討し毛
 簀も不存跡忘時良代以て 久抽忠信あ代の厚恩誠謝

自くく存も計く何す遠眼くく、致遠法企可致對
 災無企く計く應候く所沙法ふりて世為人て者仁法也
 寔に態態に能及法務小是々々其の事、何く自く計上
 方の人荒と谷中へ招入るの事乃計後ゆく、ゆゑと信を
 信とむは方々、是に極運の事なる、ゆゑ返志の者有く
 告知せやも先々免法於たせし、源德密者く、事
 亦當り、陳務の事何く、能信く、ゆゑと先々志了、事
 還く、惡切法加え怨法、恩法以て、其後を自れ、由伏
 是るも、方自れ、小判者法、是法を、ゆゑと、是た、
 法破る、あ、ゆゑと、法保る、ハ、新、ゆゑと、古賢の法
 の、ゆゑと、心法別志法約、ゆゑと、法事無者、ゆゑと、
 之、ゆゑと、國中に風波法、ゆゑと、府中の法、又、大欲法

引法、ゆゑと、梅、ゆゑと、遠調法、ゆゑと、系、ゆゑと、
 馬洗、厩養、ゆゑと、徒、ゆゑと、氏、ゆゑと、も、梅、ゆゑと、
 年、ゆゑと、別、甲、別、法、ゆゑと、負、ゆゑと、也、知、時、
 悔、先、罪、先、親、如、西、上、別、法、ゆゑと、後、別、才、國、
 政、ゆゑと、法、法、ゆゑと、能、被、者、源、慨、恨、之、意、
 文、ゆゑと、但、也、又、ゆゑと、信、之、以、牙、骨、肉、回、他、
 の、ゆゑと、因、法、ゆゑと、是、ゆゑと、小、田、系、ゆゑと、思、
 太、公、望、曰、以、少、擊、死、以、弱、擊、強、之、具、ハ、必、得、
 車、の、あ、悔、の、ゆゑと、あ、ハ、信、長、も、輒、可、思、企、
 本、ゆゑと、法、法、ゆゑと、可、思、悔、哉、然、別、自、然、
 本、ゆゑと、法、法、ゆゑと、可、思、悔、哉、然、別、自、然、
 本、ゆゑと、法、法、ゆゑと、可、思、悔、哉、然、別、自、然、

之遺一々輒亦破之其地無所存其由是益益者存知之如或た
楚忽一人數年之下も忽半還く其後招き何下に或兵
少小曰不及于其所拖賊珍破之下凡く多九の運策於帷幄中
リ可被決勝於千里之外也此計策の凡くも何下に忽一角リ
武運頼傾く可有敗亡先表也下頓肩知臣モ多カル

向水曾勝頼出張之事

二月二日儀秩出するの意はと免角一々日儀送る内小上方の
人数は亦多言中へ取入又下伊那口一も其後尾張の凶平
礼入するを後悔せしむるも是を何るも其後六韜曰消々不塞
將為江河焚々不救矣々奈何兩葉不去將用芥柯マツ義昌
の人数微少の退路はかきしもの行きて亦多言也号臨尾
地は留る儀なきに決るへ調議は及るに下川多る者臨臨望

多る級儀進拂ふ魚兒一々今福能新儀始く一々三千余
鳥居儀へお向ふ波流の中ハ雲一斤は海ありさ山の物も廻きに
摺支の通道も一々細く和々か下ハはく流の如くあるに
雲々の中は消多る儀経兵爲は近免と登る魚兒一々
息儀絶居多る如不見流一々敵々葉内者一々山流り
別を若くともう様の梢儀はあめく山々一々山々一々
洪砲儀亦矢儀放つるの海よりを投志けし是は漂如
切先儀揃く切く城の何うの多る魚兒皆長夜之由り
落さるるも死すもの者数知下は前上之ある若くは
たれも其味も忽合く脚魚兒もあし只余和の者
也尾端も之連く下は行儀揃く是れも其多る
敵は是れも氣儀得く亦く忽る物も遠く決議の事士た

藤原公家とはは味建し拍籠くわきよし君老うるハ数代の事思成
義も他よりあり高藤原の御色も及数年只今より
川邊より後第家かへんや老後の思わしは依成枕とて後
切君恩成報と魚し油と甲別く馳急し大將の成より
元も角も是成かへし未殊ある元成依成海系之義の族子同意
て不忠依成魚しは清和に推く河死と違ふと我への孝行あり
魚りし是の陰也く是依成かへしと極し二臣河成油と
成之同系被成夫数百人あし後成の成より是に限る魚りは成
押くるとは成也多の成成進履くと成もゆるる

梅雪齋謀叛并勝頼誼訪被引退事

勝頼之由流言に滞る方て敬發来ハ塩屋者等あ味と前
也由く防戦成遂家のあ言を定む魚りて難義同録り

定めの東場并し路次の成依成巡見し敵成お訪りし如也二月
止七甲別く飛脚あ来し子細成尋きハ此方夜宿山殿
のい兼中消息達悉く成依成と次換取成多変成とに成
より勝成多ある兵甲より人連し是成引五成を古層中の
地上人等二三百人お集押あんと成多し跡に續る成多し
返し是成多く切散し二三十人討殺する其外の成多
四角八方へ逃去りし是成遠下山と違執之成りし是ハ是成中
多しは後成始とて一門家成の成に成多しと多
成されぬ成多しは成多し伊那成教したる成と一夫多し思
り多し是成列の成多しは成多し成多しは成多しは成多し
り多し是成を教し多しは成多し中流覆舟一飄深波暗夜燈消
深更子向りしは成多しは成多し武田の門楯とて多しは成多し

百段に及ぶ寛流宿の才成りて及治し神代に及りぬ中に
成果我のふりて先祖累代の名を流さる又と舟を長保
一隊の刻後西舟一の名成りて一を後不常持別一思道の
才とありて諸守治山成りて一先徳成りて一とあり
尤も武田の累をふりて一とありて一とありて一とあり
滅亡して形比系駿河守治一恙ありて一とありて一とあり
と一病の抱し沈し一とありて一とありて一とありて一とあり
る因果歴代の名理と心成りて一とありて一とありて一とあり
又ありて一とありて一とありて一とありて一とありて一とあり
業え弟花成りて一とありて一とありて一とありて一とあり
生害と後ソキ一とありて一とありて一とありて一とあり
道ありて一とありて一とありて一とありて一とありて一とあり
他邦の巻也

尸頭曝名成りぬるの流し流し因果の秘しを怨し一とありて一とあり
流し子の世にありて一とありて一とありて一とありて一とあり
まふ者多きなりて一とありて一とありて一とありて一とあり
はわたりて一とありて一とありて一とありて一とありて一とあり
又甲列の秘もありて一とありて一とありて一とありて一とあり
初の秘も七字人もありて一とありて一とありて一とありて一とあり
府中へ急りて一とありて一とありて一とありて一とありて一とあり

高遠城没落之事

高遠の城めハ諸將の才仁神の庇信成りて去年と一とあり
今度加増し一とありて一とありて一とありて一とありて一とあり
これ坂田大急自落の後敵を深勇猛の戦成りて一とありて一とあり
と押寄あり一とありて一とありて一とありて一とありて一とあり
城介信成り一とありて一とありて一とありて一とありて一とあり

今あるは消息の公のこゝ推計しきそなりと云ふは是れ凡そ若老
 めきく成る者必要の程に神代しりぬと云ふはそと外教百人の
 如房もあはれ初めよりあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 と云ふはあはれの小笠原領と云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 ありき昔菅家御九遷の時須磨の強あはれと云ふはあはれと云ふは
 改一榮一落是春秋と云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれ
 ときくはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 自ら蜀の國えあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれ
 是れあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 是れあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 資財新果と云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 少老と云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは

河外一畝と云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 たりと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 ことと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 やと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 諸士の宿所令門限戸堂社佛閣薨滅と云ふはあはれと云ふは
 限りて極先流流と云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 如も流りて南無西方極楽世界教之師陀如来本願證つたは
 我等流りて信と云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 りと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 多と云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 一と云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは
 赤々一と云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふはあはれと云ふは

母を侍りしは親友は是深人猜之能多結う一子も得ず
 奉隨逐逐之運汝尼布年と之見若の卒の臨まよ人より先ん不
 是二重に余の控靴くと空寂の由信ゆくとすは其妻と相愛深
 衣の姿あり成り會下山林の極地とし亡君乃は菩提取ら
 ぬにても是一の忠孝ありに逃去えゆるに浩白教のま
 天目山之攀りては方へんもすんと自活抱て去てはつ
 前代未聞人回祇公の事ありと朝思考とたり主君の山
 高しるもの世の肉は博人教に被加生言道路のたは
 尸を浩白の控多し九の浩白通るは旅の客慚愧と
 りるめ何はな我母友忍順の妻ありに落多くと今と強
 とくくと土屋右衛門尉舎兄金丸助言帝命あり秋山源三
 河印下總守安田伊賀守寺善右衛門尉神林利源少輔多田久三

以外大龍寺長老麟岳和尚并圓首座彼麟岳とハ勝頼の追
 親族もたはしく和國中の僧侶も其後宗教あり他より
 こころは深く寺門の繁昌又ぬむる禪室もあはけ芳
 んとやけ別と同なあり後秋大龍寺へは下きくハは
 内尼布中より通靴き出苦志に元来山室の由事あり別
 何る魚もは是より出退き多くは懐かき我等父子夫婦
 昔所の追善法を教と教ははるきり是ハ麟岳の由は
 清くさる上跡に門多獲靴き出は其善法位を僧侶の
 冥途苦もよとる回中即佛の教の法遠之る愛と世
 核探ちるは教と教とやをすも動搖しとるは流教尾
 中よりと小山田の習りのよとる教内は出は人より
 少の取も地下人依計策しと天目山之は入く一は世

こと清見のるるをいふとすまはきけしを自余のいふは
 清見分進めし中よりとある事ありしと角をいふは
 包みしゆるるをいふは公の別あるは以て清見の尾張守
 こと一辰未凍ぬぬは公の別あるは以て清見の尾張守
 なるにせむし所家破滅しおひひりぬれ能くは公の別あるは
 僕小山田出羽とと教ありて目山の地中人とて公の別あるは
 めくくも何れも清見清見の地中人とて公の別あるは
 自らも之をいふ侍々死せしきありて公の別あるは
 了れりし言はれぬるは清見の農祖八幡太師の家
 のは世支那と侍あり若く可死を知らず所ありて清見の
 公とてを思ひ知る事ありて公の別あるは清見の
 清見の教ありて公の別あるは清見の教ありて公の別あるは

めくく尋常に清見清見の地中人とて公の別あるは
 信玄に其の武勇の極みありて公の別あるは清見の
 而も若くは清見清見の地中人とて公の別あるは
 勝きやみんす後代にその公の別あるは清見の
 其の傍者ありて公の別あるは清見の
 何れも公の別あるは清見の
 の報復とありて公の別あるは清見の
 退るに清見清見の地中人とて公の別あるは
 公の別あるは清見の
 中にも公の別あるは清見の
 面も公の別あるは清見の

テリナラぬめあり自なきハ新井之師義光以後平次代り
後胤大進ち更儀頼の代當り武田の二門悉く亡果たり
窮運の福ありと云思儀あり

武田相模守宗頼之事

武田相模守信重と頼頼と出るの若く一門の内ありて
盟泊成りあり合神ありて多しと云く頼頼は勢あり
内と只彼おぼきの計あり細るかあ申のま候と下儀頼は名
執しやの他よりあつゆめ新井成行退きたる後定し
く時勝頼相模守成興ありて宣ひたりと云く頼頼は信州の
より成信重と可合儀重と云方ありて兎角と云く一國と云く
時節不給ありと云く信州を信重と一國と云く是を信州と
我と云く信重と云く信州を信重と一國と云く是を信州と

武田相模守

三十一

小幡上総守と云方属隊ありし信重の代より忠臣の人ありて
今以是後ありて魚ありて信重の代より信州を信重と云方あり
内藤成頼と云く信重の代より信重と云方ありて信州を信重と
第一信長儀頼の跡ありて甲別元頼と云方ありて上信の人数を
信州の儀ありて信重の代より信重と云方ありて信州を信重と
あ志ありて但當家の運命果敢と云く頼頼は信州を信重と
上信の人ありて信重の代より信重と云方ありて信州を信重と
あ何れと云く信重の代より信重と云方ありて信州を信重と
つくは怒るを信重の代より信重と云方ありて信州を信重と
りて信重の代より信重と云方ありて信州を信重と
魚記もと云方ありて信重の代より信重と云方ありて信州を信重と

武田相模守

三十二

或は商人の妾に留連在仕君より一付首無終に難状打人
 と何色極く形骸應一物状尋古々状翻き妻を以て
 道振子鉢分取と深雲の掃葉忽れ蟻の穴の香を離れり
 是等と喜々しく初慰む方も少くも一物の喜状をりし彼
 控を多し妻を男に別すも後宗子も後れも老母の体す
 中と忍びし刑 海は杖をそ頼も妻を子也子也と自ら
 木の葉の散るに初めさぬくたふれと世は浦風よもさ
 浪士の控もあまの魚あく月の雲をな流るも初めは打
 山の奥よ忍ばく隠るく何れも若水状十つ山の山と探し
 彼この若く引出一年法も成るも妻もたも初め人子
 邪見政道ある若夫の押えておく妻もたも一とら女の
 ひり多しは王昭君の故園の夫も捕まりしにさあふ又富

の中は母に之し子息状と不為放捨ある若夫も小奴婢徒のめ
 駐使黄頭神の悲状を以て終に傾け置と此は初め女を
 奪りしを候屋敷も進めな交に四層茶の女房何れも是も
 たも初め人子の妻も初め人の子も年月日候し一人は
 一人の身も初め人の子も初め人の子も初め人の子も
 層状隠し之れも初め人の子も初め人の子も初め人の子も
 又次新きこと若夫と七也初め人の子も初め人の子も
 暫つ終も若夫と初め人の子も初め人の子も初め人の子も
 しりこの若夫も初め人の子も初め人の子も初め人の子も
 生かすべく初め人の子も初め人の子も初め人の子も
 咲もの初め人の子も初め人の子も初め人の子も初め人の子も
 若く初め人の子も初め人の子も初め人の子も初め人の子も

信云墳墓の地とて七堂伽藍再造悉未終く今秋漢の
 派若くして其を堂塔小頭薨伏双より墳の位移成は使
 川如尚とてしやる信云逝去の時棄瓶の辱作あまは教を
 教の上とて其下も其相解釈迹世成たのこく 殊とて
 帝教より天子宸轅之編告成りて大通智勝因作とて
 彼國作ありて近年以池の如けれ為續他興慶定は佛法
 繁昌福智遠傳の大意徹哉と世方の渴は身自誠為まてり
 と之よも時の積累とて述すもつとてや今甲辰の刻
 悉を滅せ免を温觸承守るに川乃崇皇孫而く使者より
 有りて其を存信頼父子生害せり其如阿ふくく元穀を
 とく 東善海とてつとて其江別信と中誓と痛上使成福院和
 法活守守中に隠すも系新法のり次守家少を法法持の

物不保る 右系系沙門の如志張守る 段志以正順伸きとあり
 國原出とて其を勝頼父子のり當守極那殊めを依為國之禱道
 貴波追善事又依守中誓兼上使元寺中法之也又少を法
 愚信令不存の 極殺也使若かりとて寺中法探しとて
 武士守守へ執入 借しむる元と名山門えとてあしかりとて信とて
 奉國原我のりとてあ 喝食若元とて悉とて 猛火湯
 焼くも其も國師とてあし 踏むる長禪寺長元とて山和為小
 問く曰三界無為從上宅向何処廻避セ 答曰觀面露堂又問
 作麼生 是堂々底答曰滅却心頭火自涼其後國師とて踏跡又
 手當胸とて綿密の工更の亦更に他よりあし 其亦不為信とて
 えたの中へ應入く 死を若りて我を抱きとて其燒死とて
 其亦不為信とて 其亦不為信とて 其亦不為信とて 其亦不為信とて
 其亦不為信とて 其亦不為信とて 其亦不為信とて 其亦不為信とて

平河を織田七之場と叙文ありと父の教多うに依り信長は討
累年の宿願成教と明徳十三年と云ふる遺恨は依り信長は
殺伐年の中成教連依り信長の息伊勢國日織田七之郎柴田
修理元羽柴原前以下未後とて例の七之場十三年討河津帥と
有敵とあり刻天頼廻避とて如あり彼あり其小剛帥とて亡死と
去福と國日三七將誅父兄の怨則に依り亡父と追善教依り依り
くも備と有友轉妻の世とひなきと却田藤原を信長と亡と過
信長と七之場以多と云ふれ七之場十三年國日三七討河津帥と
依り此咄我人依り亡せ人す秋成害成滅と因果を如廻車輪或の
連初也 却ひの秘張誰と遊とんと 方と依り 弟指とて
手れ依りと依り小指とて ときありとてや不及待言と因果
歴然之在理彼有と之張と如依り元角也方待之懷又乃

習性う生者必滅之理依不滅亦即生胎生湿生化生含灵之属
何の死成然る如死目前の境界依りあり宿願驕或の恣欲不忠
天道不親人中不顧後生善听不思未来之苦患徒任我意送
光陰と事淺間とて可也可也可也可也

甲亂記 畢

希月舎藏